

# フークトーフ通信 69

百貨店と地域のにぎわい

荒川 瑛楠 (福島市)

福島駅東口では、駅周辺の活性化を目指して官民を挙げた再開発が行われており、新たに多目的ホールや広場、屋上施設などが設けられる見込みだ。施設使用例の一つには「百貨店での人気コンテンツである物産展をこの場所で楽しむ」ことが挙げられ<sup>(1)</sup>、今後は西口の福島県観光物産館とともに逸品を気軽に味わえる場となるだろう。



1931(昭和6)年頃のものと思われる  
絵葉書(筆者蔵)

明治期の博覧会に端を発する県物産の陳列・販売は官民それぞれの形で常設化した。前者はいわゆる陳列所で、各府県状況を反映しながら独自の発展を遂げた<sup>(2)</sup>。後者はいわば勸工場から百貨店へ発展し、大正初期頃に始まった「物産展」は百貨店を象徴する催事となった。

福島市では、一九一一(明治四十四)年十月、県物産の販路拡張を企図して福島県物産陳列館が開館した<sup>(3)</sup>。県庁敷地内の紅葉山公園に建ち、外観と内部構造は東京上野の表

慶館を模しつつ、福島県模型図や事務室、集会室などを備え、県と産業の実態を示す物産陳列所として表慶館を読み替えた独自の構造を持っていた<sup>(4)</sup>。

しかし大正後期には、立地の不便と業績不振を背景に、一九二七(昭和二)年十一月四日に開業した「福島ビルヂング」内へ移転した。このビルは、不況下に活気を生むため官民が設立した商業施設で、目抜き通りの本町四つ角に建った。内部には陳列所のほか市立図書館や商業会議所、中村合名会社(「中合」)売店、眼鏡専門店、靴店、書店、万年筆専門店、菓子店などの地元の商店に加え、森永製菓直営店、食堂、ビリヤード場、県下初のエレベーターを備え、屋上からは市街を一望できた。

陳列所は官製の施設でありながらも、時代の要請に伴い、百貨店然とした施設の一部へと変容した。筆者は、地域活性化の活路を百貨店に見出す点を、現代にも通じる福島市の特徴と考える。今後は、近代の陳列所での催事や陳列内容を踏まえ、福島市の商業空間や消費文化の変遷について考察していきたい。

(1) 福島市ホームページ「コンセプトを実現する多様な利用シーン」  
(<https://www.city.fukushima.fukushima.jp/soshiki/12/1063/1/5/3632.html>) 最終閲覧：令和八年二月二十八日)

(2) 三宅祐也『近代日本(陳列所)研究』(思文閣出版、二〇一五年) 七七八頁

(3) 福島県物産陳列館『福島県物産陳列館年報 第一』三七八頁(福島民友社、一九一二年)(国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/801647> 八一一一頁 最終閲覧：令和八年三月六日)

(4) 前掲註(2) 四一八―四一九頁